2001年度地学を楽しむ会「秩父盆地の地形と火山灰をみる」報告

主な行程：麹町地学協会 8:30 →花園 IC →黒谷付近で荒川左岸へ→（上寺尾）→ 11:00　StopA：小鹿坂遺跡（と呼ばれた尾田蒔丘陵頂部）→ StopB：長尾根遺跡（尾田蒔礫層と火山灰の観察）→昼食（秩父ミューズパーク）→ 13:00　StopC：三菱マテリアル敷地（尾田蒔丘陵のテフラ観察）→ 18:30 新宿（解散）

案 内 者：鈴木毅彦（東京都立大学）

11月11日〈秩父盆地の地形と火山灰をみる〉会に参加させていただいた。天候は晴れ，東京地学協会前から大型観光バスにて出発，総勢34名，インストラクターは都立大の鈴木毅彦助手。関越自動車道を花園で降り，荒川に沿って秩父山地に分け入ってゆく。もっとも今回は渋滞を避け最近開通したばかりのバイパストンネルを経由したので瞬時に秩父盆地の底に出た。

私は30年以上もナショナル・ジオグラフィックを購読している地理好きだが，地学は長い間とっつきにくく思っていた。ところが2年位前から妻が40の手習いとでもいうのか，やれ○○火山がどうの，○○プレートがどうの，これは○○岩…などと言い出し，入生田にある博物館のボランテイア仲間に入れていただくに至って私もかなり影響を受けることとなった。最近では地理も地学も正に一体，なにも呼称を分けずともよいではないか，“ジオグラフィ”で包括するか，あるいは“アース・サイエンス”で汎用性を持たせる，でいいのではないかと思っている。家の近くを散歩しても露頭などあれば，これは野島凝灰質砂岩で昔は海底の堆積物だったなとか，縄文海進の際はこの辺が波打ち際だったはずだなとか，大変に面白くなってきた。見えている地形とそれを形造る見えない部分の私の内での融合，今後が大いに楽しみだ。ということで今回，妻がウェブサイトでこの企画を見つけた時，私から進んで“わしも”族になった次第である。

さて，バスは右岸の河岸段丘から結晶片岩の河床を美しく流れる荒川を渡り，交通量の少ない左岸の段丘上に移る。対岸の大きく2段に見える段丘下段に秩父の市街地やセメント工場を眺めつつまもなく今は侵食により尾根様になった最上段の段丘面（尾田蒔丘陵）に最近開発された秩父ミューズパークに到着。ここの3箇所で鈴木先生，時に早川先生（群馬大）も交えてのレクチャーのもと観察が行われた。第1地点は，秩父原人か，50万年前の旧石器かと騒がれた小鹿坂遺跡（写真1，2）。この場所で旧石器発見の捏造がここ数年の火山灰編年学の飛躍的進歩の裏をかいて行われたらしい。しかし，50万年前の自然活動という厳粛なる見えざる手と，厳しく真実を追及する科学者の

写真 1　埋め戻された“小鹿坂遺跡”の見学.

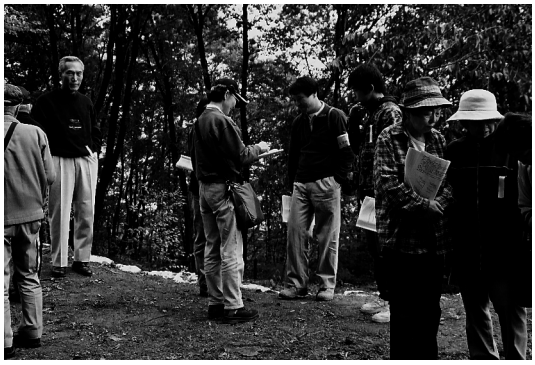

写真 2 “小鹿坂遺跡”で講師に質問.

目が今の世の人間の邪道を裁く小気味良さ。第2地点では最上段丘面から少し下がった道路際の露頭と長尾根遺跡での火山性堆積物の観察を行った(写真3，4)。第3地点は三菱マテリアル社が段丘面のローム層を採取した後に残された大きな露頭(写真5)。礫，火山灰，軽石，スコリア…，西方，八ヶ岳や茅ヶ岳，さらに北アルプスからの火山性降下物が織り成す，美しくも多層・多彩な天然の大壁画。ついつい，もしやして6500万年前に遠くユカタンの地に落ちた巨大隕石の，あの恐竜達を死滅させた粉塵も，あるいはもっと近く姶良カルデラからの火山灰も？と想像が膨らむ。表面からは分からぬその土地・地形の成り立ち，現在に至るまでの長い時間と様々な作用…。かくして盆地といえばそれこそお盆の底のように真平らな奈良盆地を思い浮かべる私だが，今回のツアーでなぜ秩父盆地はそうでなく盆地底に何筋かの凹凸，丘陵が走る盆地らしくない盆地なのかが良く理解できた次第。楓や銀杏の色付きが丁度美しい秩父の里だったが，午後あいにくとガスがかかり甲武信ヶ岳，三峰山など外秩父山地の峰々が見えなかったのは残念。武甲山だけはその傷だらけの姿を眼前に現したが。

写真 3　尾田蒔礫層と火山灰の観察 1.

写真 4　尾田蒔礫層と火山灰の観察 2.

写真 5　尾田蒔丘陵のテラフ観察.

つるべ落としの秋の陽が4時半頃に沈んで一路都心に向かうバスの中，先日アメリカはロサンゼルスの自然史博物館での光景を思い出す。そこは大きな恐竜（T-Rex）の骨格の展示場脇にある恐竜の化石発掘を疑似体験できるコーナーだ。多くの子供たちが目を輝かせて一生懸命刷毛で巨大な化石の一部を露呈させている。そして近くで見ている父親に向かって“やったよ！”と叫ぶ。最近テレビ番組にディスカバリー・チャネルが登場，その中には“ディスカバリー・キッズ”という番組もある。日本の将来を担う子供たちにもっと自然科学に興味を持ってほしいと常々思っているのでこれは嬉しい。ニューヨークや，ワシントンDCや，ロスの自然史博物館で多くの子供たちが両親に，父親の場合も多いが，連れられて生き生き，そわそわと歩き回っているのを見るにつけ日本ももっとなんとかしなければ…と思う。日本の若い親たちにもっと広く東京地学協会の存在を知ってもらいたいものだ。

今回のツアーでの鈴木先生，早川先生のご指導，協会の行き届いたアレンジメントに感謝致します。

（匹田勝晤）